

外国人の人権尊重に関する実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

福井県

○学校名

掲載しない(学校種：小学校)

○教育委員会のURL

<http://gimu@pref.fukui.lg.jp>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各2学級、【特別支援学級】2学級、【合計】14学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】352人（平成28年4月1日現在）
（内訳：1年生57人、2年生64人、3年生57人、4年生51人、5年生56人、6年生56人、特別支援学級11人）
・全校児童数のうち外国籍児童61名
・日本語の指導が必要な児童15名
・転出（帰国）、転入（編入）が激しい。一時帰国者も多い。（2～3か月）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

昭和62～63年度 人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
生きる力をはぐくみ、心豊かな〇っ子の育成
【人権教育に関する目標】
自他の人格を認めあい、支え合ってともに生きていこうとする児童の育成

○人権教育に係る取組一口メモ

県内の外国籍児童生徒在籍の割合が約50%以上を占める市である。この市内にある本校の児童の実態は、以下の様子である。

- ・のびのびと行動し明るく元気である。
- ・素直で人に親切である。
- ・創造性や自己表現力が十分に育っていない。
- ・外国籍児童が17%在籍する。

以上のようなことが挙げられる。このような外国籍児童が多く在籍する実態の中で、特に、道徳や総合的な学習の時間および特別活動を通じて、異文化を尊重し、多様な価値観を認める態度を育成している。

○人権教育に係る取組の全体概要

- (1) スクールプランへの位置づけ
様々な国の言葉や文化の違いを理解し、お互いを尊重しようとする態度を育てる。異文化理解に努め、お互いを思いやる人権意識の向上を図る。
- (2) 校内の研修や活動で異文化交流を図る。
地域・学校協議会で、学校の取組や現状を報告し、意見を求める。

3. 実践事例の内容

(取組のねらい、目的)

グローバル化が進む今日、「国際社会に貢献できる日本人」の育成のためには、国際理解や国際親善は重要な課題となってくる。毎日、一緒に生活しているクラスの仲間に外国籍の児童がおり、「異文化理解」に学校全体で取り組んでいるという環境の中、それぞれの国にも、日本と同じように独自の伝統や文化があり、人々は、それを誇りに思い大切にしていることを理解させることは、外国の人々や文化を尊重し、共に生きていこうという態度を身につけさせることにつながると考えられる。

(取組を始めたきっかけ)

全校児童数352名のうち外国籍児童61名、日本語の指導が必要な児童15名が含まれる。また、転出(帰国)、転入(編入)が激しく、2~3か月におよぶ一時帰国者も多い。このような実態の中で、学校としてスクールプラン(学校運営計画)に位置づけ、「様々な国の言葉や文化の違いを理解し、お互いを尊重しようとする態度を育てる。」と題し、異文化理解に努め、お互いを思いやる人権意識の向上を図っている。

(取組の内容)

(1) 日本語指導体制の充実

- ・トゥカーノ教室での日本語指導(6名体制)
日本語の習得が必要な児童に対して、毎日、取り出しで国語や算数の授業を実施する。習熟度が違うために授業は数人単位で行っている。外国籍の子供たちは、親の就労に伴い移ってくるため、転入の時期もまちまちである。昨年度は、毎月、新しい転入生がいた状態であった。
- ・指導体制(6名)
 - 教員：日本語指導、日本語指導週予定作成
 - アクセスワーカー：保護者対応、翻訳、通訳、日本語指導
 - 外国児童支援員(2名)：日本語指導
 - 巡回外国児童支援員：日本語指導
 - 教育振興課職員：教室での授業の通訳、外国籍児童家庭との連絡
- ・プレクラス(1か月)で生活に必要な語句を学ぶ。それ以後は、体育や音楽、図工、クラブや委員会活動に参加し、日本国籍児童と交流していく。
- ・指導方法についての検討会(管理職も入る)を毎週木曜日に実施している。

(2) トゥカーノ集会(特別活動)

トゥカーノとはブラジルの国鳥である。
クイズやゲームを楽しみながら、ブラジルの国について知る。

集会の様子は、以下の通りである。
ブラジルクイズは3択クイズ形式で、答えだと思ふ番号を指で示す。
ポルトガル語を学ぼうでは、「だいじょうぶ」・「ありがとう」・「とてもいいね」の言葉や、じゃんけんの言い方とやり方を学んだ。



ポルトガル語で行うじゃんけんゲームでは、児童会の代表の児童1名と全校のみんながじゃんけんをする。ブラジルの児童がマイクを使い、一緒にポルトガル語でかけ声をかけながらじゃんけんをした。

〈集会に参加した児童の感想〉

- ・ステージではすごく緊張したけれど、みんなの笑顔で楽しい気分になれた。仲間がいたからこそ成功できた。
- ・とても楽しくよかったと思う。ブラジルのことが少し分かったので、ブラジルの人とも楽しくしゃべってみたい。

(3) フェスティバル（体育大会での2か国語アナウンス、異文化交流による発表）

「友達になるために」誰もが幸せに生きるためにはどうしたらよいか。総合的な学習の時間で学んだことを発表した。（4年生）

ブラジルってどんな国なのか、今まで絆を深めてきた6年生が、演奏や演技で表現した。（6年生）

(4) 朝の会・帰りの会での挨拶

朝 グッドモーニング・ボンジーヤ・おはようございます

帰り シュー・チャオ・さようなら

各学級では、毎朝、全員が3か国語で挨拶をしている。

※体育大会においても、常に日本語とポルトガル語の2か国語アナウンスで進行している。

(5) 教員の研修

ブラジルの日本人学校の教員による現職教育

（本校勤務の外国人指導担当講師：日系ブラジル学校での勤務経験あり）

ブラジルにおける「日本」のとらえられ方、日系人に対する偏見、日系人にポルトガル語を教える時の困難さ、文化の違いによる「当たり前」の習慣や考え方の違いなど、本校のブラジル人と日本人の立場を逆にした見方を紹介してもらい、教員の人権感覚を再確認し改めることができた。

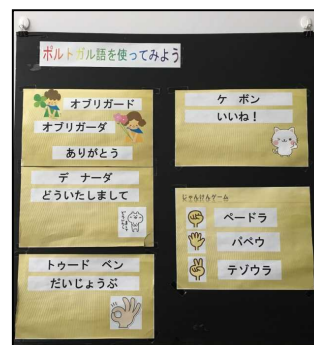
(6) 環境の整備

校舎内にポルトガル語と日本語の表示を、お互いの文化交流を図るとともに親しみやすいように掲示している。

○部屋の表示



○簡単な挨拶やよびかけの掲示



特に、集会で活用した言葉を掲示物として表示し、全校の取組として掲げている。

(取組の主体や実施体制)

- PTA役員(保体部員)にブラジルの保護者を初めて選出した。
- フェジョアードを給食週間の献立やオリンピック応援献立に組み入れた。
フェジョアードとは、フェジョンという黒色のインゲン豆を牛の干肉などと一緒で煮込んでニンニクと塩味でスープのように仕上げたブラジルの郷土料理である。
- 外国籍児童保護者会の開催(通訳3人)
日本国籍児童の保護者会の前に2日間、通訳を交えながら、外国籍児童の保護者と懇談する。
- 配布物の翻訳
・学校から渡すほとんどのお便りを、ポルトガル語に翻訳している。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(課題、課題が生じた背景)

生活面や学習面で適応していると思われる外国籍児童はまだまだ少数であり、そのほとんどが困難を抱えている。母国から直接、本校に編入してくる児童が増えてきている。また、言葉の理解が不十分で、学力が身につかなかったり、生活の中で行き違いが生じたりすることがある。さらに、外国籍の児童が多くなる中で、無理に日本語を使わなくても生活できるようになり、日本語を覚えようとしないう児童も出てきている。

(課題に対する対応)

学習面においては指導内容を厳選し、より効果的な指導で日本の学校に早く適応させることを考える必要がある。また、日本語の能力を高め、適応を促すだけでなく、彼ら自身が日本の学校文化に適応したいという心も育てる必要がある。



5. 実践事例の実績、実施による効果

(取組の実績)

本校には全校児童352名のうち、外国にルーツがある児童が61名在籍しており、これは、全体の約17%で各クラスに約5~6名在籍していることになる。どの児童も楽しく登校し、友達と交流したり、学習に励んだりしているが、異文化交流事業を通して、次の3点について成果をみる事ができた。

(取組が効果を上げた実際の事例)

①自分に対する自信をつける

体育大会やフェスティバルでポルトガル語を話すという、自分のありのままの姿を他の子たちに見せたことで、クラスの子供たちからポルトガル語の能力を認められ、それが自分への自信となっている。いろいろな要素を取り込んだ活動を展開することで、自分に対する自信をつけ、自尊感情を向上させている児童が多く見られるようになった。

日本語が不十分な子への通訳や、学校行事や集会活動の中で役割を持たせることにより、自信を持って活動できるようになったり、お互いを認め合うことができるようになったりしてきた。

②新しい見方ができる

ポルトガル語やブラジルの郷土料理などの異文化を取り上げたことで、自分や他者の言語や文化に対する興味や理解が進んだ。外国籍児童にとっても、自分が生まれ育った国が持つ文化的な背景を肯定的にとらえるよい機会になった。また、外国語といえば英語にしか興味のなかった子供たちが、ポルトガル語や異文化に対して興味を持ったことも分かった。

③共生を目指す雰囲気

児童や保護者、地域の中に、偏見をもたず共生を目指していこうという雰囲気ができ始めている。子供会活動や地域の活動に参加する外国籍児童も増えてきた。また、外国籍の不登校児童はほとんどいない。

6. 実践事例についての評価

〈児童の感想から〉

- ・ブラジルの紹介をしたクイズをしたり、ポルトガル語の勉強をしたりして、とても楽しかった。
- ・ブラジルの子と話ができないときは少し困っていた部分もあり、近づけなかったこともあったけれど、この集会で少しブラジルの子に近づけたような気がした。
- ・1回目のトゥカーノ集会と違い、ブラジルの有名な場所などいろいろと知ることができて良かった。ブラジルは有名な所や物がいっぱいあるので、すごいなと改めて思った。
- ・新しいブラジルの言葉も知ることができ、これからも使っていこうと思った。

〈保護者の感想から〉

- ・外国籍の同級生と遊ぶことが当たり前だと子供が感じているのが良いことだと思う。先日、〇〇ちゃん家族とカラオケに行った。互いの歌は分からなかったけど、こういったことができることも、ふだんから異文化交流事業に取り組んでいる成果だと感じている。
- ・子供たちは、ブラジルの子とも仲良くしている感じがする。言葉もいろいろと覚えられていいと思う。保護者同士の交流をもう少し持てるようにしていただけたらいいと思う。また、ブラジルのことを知ることが大事だが、日本のことやしきたりなどを知ってもらうことも必要だと思う。
- ・日々、子供たちが国際的な環境の中で、多くのことを学んでいる。言葉の違いや文化の違いはあるものの、同じ人間として、お互いを尊重し合える関係を日々の生活の中で多く学んでいると思う。
- ・運動会も保体部のブラジル人の保護者の方が手伝ってくれた。打ち合わせの時、日本語が伝わっていなかったため、集合場所が違うときもあったが、率先して手伝ってくれたため、スムーズに運動会が進んだと思う。
- ・近くの学校では一番この小学校が生活しやすいと、保護者や子供から聞いている。便りや通訳等、手厚い補助のおかげだと思う。今年度だけでなく続けることが大事であり、子供たちもブラジル等の子供たちがいるのが当たり前だと思い、そのことでいじめもなくなり外国人も生活しやすい学校になると思う。
- ・本校での取組はたくさんあり、特に印象的なのは今年度のフェスティバルだ。どの学年も異文化を意識した発表で、外国籍の子供たちが大いに活躍できたと思う。

学校内にも掲示物にポルトガル語の案内があったり、ちょっとした挨拶の表記もあったりした。子供たちもすぐに使えると思うし、今後もますます異文化交流が盛んになるといいと思う。

- ・近年、多くの外国の方が本市に住居を構え、多くの外国籍の子供たちが日本の子供たちと共存した中で教育を受け、また多くの事柄に対し協働している中、交流を深めていくことは大変良いことであり意義があると思う。習慣の違い等、もっと互いに理解し合うことも大事であり、交流の機会を多く設けるようにしていく必要があると思う。また、他国の方が事業に参加しやすい雰囲気作りに努めていく必要もあると感じている。

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

グローバル化が進む今日、「国際社会に貢献できる日本人」の育成のためには、国際理解や国際親善は重要な課題となってくる。毎日一緒に生活しているクラスの仲間に外国籍の児童がおり、「異文化理解」に学校全体で取り組んでいるという環境の中、それぞれの国にも、日本と同じように独自の伝統や文化があり、人々は、それを誇りに思い大切にしていることを理解させることは、外国の人々や文化を尊重し、共に生きていこうという態度を身につけさせることにつながると考えている。